《資料9》

「日田市文化財保存活用地域計画」第３回ワークショップ　取りまとめ結果

日田市の歴史文化の特徴について

班	主な意見（キーワード）	その他の意見（キーワード）	
		（１）伝統文化（無形文化財）の今後について	（２）私にとって日田の一番の歴史文化とは
①	・人と文化の交流が栄えた理由として、川と山による「水」がある。 ・天領であった江戸時代が日田市の歴史文化の特徴の中心となるのでは。 ・咸宜園	・祭りの文化財指定当時と現在の状況は異なっている。 →時代に合った祭りのかたちに変化させなければ、祭りの文化を守れない。 →祭りの日程を平日から休日に変更 →神事に女性も参加できるように ・日田祇園は日田市全体の文化ではない印象がある。 ・各地域の祭りのお囃子と太鼓は小学生を中心に行っている。 ・五馬地区の神社等、こどものいない地域では祭りができない。 ・祭りはもちろん、自治会自体がなくなりつつある。 ・保存会の会長は祭りに対する明確な目的意識があるが、市民全体としては祭りの意味や目的の理解が進んでいない。 ・文献がなくいつから始まったか分からないが、お伊勢さん信仰も多い。 ・前津江の大野楽、有王社の河童伝説 ・氏子の継承が困難。移住者が氏子になるのは難しい。 ・担い手の確保はもちろんだが、地域住民の「意識」の問題も大きい。 ・今ならまだ守れる祭りも多い。かたちだけの文化財指定ではいけない。 ・少なくとも記録保存は行うべき。現状、５年に１度記録保存をしている。 ・他集落との連携	・鵜飼の継承の必要性 ・三隈川と関連する人の交流 ・装飾壁画（ガランドヤ古墳） ・地形と気候の関係性 ・「水」による自然（川と山） →鵜飼 ・進撃の巨人 ・食文化の発展 ・人の動き、交流（熊本や福岡） ・永興寺の階段横に個人的趣味で古墳を玄関に飾っているお宅があった。 ・日田では村ごとに木材が割り当てられ、重宝されていた。 ・水のための保安林はどうしても漁業を中心に考えられてしまうが、林業も守っていかなければならない。 ・山の掃除ができず、里山づくりが難しい。 ・災害で使えなくなってしまった木材は売ることができず、そのまま捨てたままになっている。 ・下駄づくり ・牛馬祭り、荒神 ・非日常から日常へ

《資料9》

班	主な意見（キーワード）	その他の意見（キーワード）	
		（１）伝統文化（無形文化財）の今後について	（２）私にとって日田の一番の歴史文化とは
②	・町人文化 ・町人のはたらきによって「金融街（city）」として文化や仕事が発展した。 ・字名を調査すると歴史文化の特徴がみえてくる。 →字にあてることのできない名や発音 ・日田弁のやや上からの言葉遣い →商売に影響を与えたのではないか ・発掘調査で出土した遺物の分析（なぜこれが、ここで出土したのか）	・神事は神事として継承していくのが筋である。一般の人は山鉾をなぜ曳くのかについても知らない人が多い。 このような日田祇園の本来の姿や当たり前の事をしっかり伝えていく必要がある。 ・文化財指定の有無を問わず、次世代へつなげていく必要性がある。 ・一般に知られておらず、地域住民等の参加はないものの、神事として毎年行われているものも多い。 ・日田祇園の「パイパイ」、「英彦山がらがら」（魔除けのお守り）がある。 ・日田の場合はパイパイを魔除けの飾りとして持ち帰るが、京都の場合は集めて燃やすことで無病息災を願う。 ・祭りをただのイベントとして終わらせてはいけないのではないか。イベント的な行事はなかなか続かない。 →地域住民が祭りの意味を理解する必要がある。 ・行事としては何度か途絶えているため、おおもとの資料が少ないことも課題である。 ・わらじをつくる会（仮）を発足し、文化の継承（以下①～④）の循環を目指したい ①地域住民がわらじの編み方を学ぶ ②掛け干しの藁をつくる人々との連携（手作業による農業の継承） ③自分たちのつくったっ藁、わらじを祭りで使用（祭りの継承） ④祭りへの参加へ（興味関心の向上、交流の場として機能）	・日田は古代の戦争の記録等ない。 ・天領と呼ばれるようになったのは明治以降。江戸時代ではない。 ・土地の名前は地形や事象によって誰かが名付けたもの。 →時代の変遷によって変化するから調査が難しい。 →「わたり」という地名が２つあるが、どちらが本来の船の由来か分からない。 ・発掘調査の成果として、時代、地点、出土遺物の関連を整理する必要がある。 ・ガランドヤ古墳 ・地域計画の委員会で、『進撃の巨人』について素案で触れるべきだという話が出た。 →日田という土地は、作品が生まれた背景や、作者が育った環境（社会、自然、文化）に大きな影響を与えている。 ・日田独特の地形や地質 ・日田の人間の移動 →①大友、大蔵関連 ②武士団（蒙古襲来） ③江戸の町人 ④明治以降の人々 ・日田は人の往来が多い土地であったはずだが、日田に定着し、育ってきた文化が少ない印象がある。うたや俳句も少ない。 ・天領としての母体や意味合いが他と異なる。 →日田は経済の中心ではなく、年貢の集積地として発展した。

《資料9》

班	主な意見（キーワード）	その他の意見（キーワード）	
		（１）伝統文化（無形文化財）の今後について	（２）私にとって日田の一番の歴史文化とは
③	・日田祇園をはじめとした祭りは、性別問わず協力して行っていくべき。 ・咸宜園を世界遺産に登録する取り組み ・西有田地区という狭い範囲に２つの中世山城があることにも注目すべき。 ・字名の調査 ・水郷日田として、山桜をはじめとした自然を大切にしていくべき。 ・五馬地区の祭りなど、祭りが消滅の危機にある。 →コミュニティを大切にしていく必要性がある。 ・風景の美しさだけではなく、人のやさしさが重要 →観光客に対して丁寧な対応をすることで、「また来たい」と思ってもらえるように。	・日田祇園は神事として大切に守っていく必要がある。 →コロナの影響で開催ができなかったこともあり、さらに担い手の確保が大変な状況である。 ・大原八幡宮の信仰 ・わらじは、曳き手50人に対して数が不足している。 →現段階でわらじを作れる人が少ないため、今のうちに作り方を伝えていく必要がある。わらじ作りのボランティアを募集したり、わらじ作りを指導してもらう機会を醸成したりして担い手の育成をしていく必要がある。 ・神事という理由で女性参加ができないが、今の時代には合わなくなってきている。維持していくためには、やれる人でやっていかないと滅失してしまう。	・水郷日田（せせらぎの音、「すいきょう」と音も濁らない） ・アユ（簗）川とのかかわり ・咸宜園 →現代の広瀬淡窓の育成 ・地形と人とのつながりから生まれた文化 ・杉を切ることで水がなくなる時代もあったが、今はダムによって解消された。 ・字名の由来はその土地の特徴と密接にかかわっている。 →名字についても地域の字名からきているものが多い。

《資料9》

班	主な意見（キーワード）	その他の意見（キーワード）	
		（１）伝統文化（無形文化財）の今後について	（２）私にとって日田の一番の歴史文化とは
④	・川とともに歩んだ歴史（水害、信仰、河川交通） ・山（緑、下駄、修験道、祭り、林業）、製材業所 ・交通の結節点 ・天領（商人のまち） →上記のキーワードは日田の各時代における歴史文化の根底として共通しており、祭りにも関連している。	・祭りの起源や目的、趣旨をきちんと理解する必要性がある。 ・祭りに参加することで精神的充実感や成功体験を味わってもらうことで、継続的な参加につながるのではないか。 ・実際に祭りに参加している人たちが祭りについてどう感じているか。 ・人手不足、資金不足 →口承の文化は知っている人がいなければ途絶えてしまう。 →実際に復活するのは難しいと思うが、記録に残しておけば、途絶えてしまったとしても復活が可能となる。 ・祭りに係る技術の継承も必要である。 ・祭りは閉鎖的、限られた人たちのものというイメージがある。 →外からの人を受け入れることで発展へつなげていく。 ・地域の繋がりが希薄になっている。 ・準備等を含め、祭りに参加する時間がない。 ・伝統だと言って切り離すと文化はどんどん廃れてしまう。伝統も時代に合わせて発展的に変化させていく必要があるのではないか（女性の受入など）。 ・神事がイベント化してしまうと、指定文化財という観点から考えると文化財としての価値が失われる恐れもある。また、一般の方々に誤った理解を与えてしまう恐れがある。	・英彦山：山伏、林業、下駄 ・川：鵜飼、やな ・天領：商人、町人、廣瀬淡窓 ・街道：文化交流 ・盆地の地形→日田の気候に大きな影響 ・伝統芸能や工芸に関心がある史学科の学生が多い

班	主な意見（キーワード）	その他の意見（キーワード）	
		（１）伝統文化（無形文化財）の今後について	（２）私にとって日田の一番の歴史文化とは
⑤	・祭り ・山（英彦山等） →幼少期から目にしてきた市民にとって普遍的な存在 ・シンボルとしての文化財と、それぞれの心の中にある文化財 →まずは知ってもらうことが大切。	・宮崎県の神社の神楽等の人手不足も課題になってきている。 ・祭りに女性が参加できないというのは、室町時代以降の中国大陸からの思想の影響が大きい。 →祭りを守るためには性別や年齢による制限を緩和し、門戸を広げる必要がある。 ・役員の負担が大きい（神事として、料理を作らなければならない等）。 ・親から子へ、意識をもって伝えていかなければならない。 ・近年、熊本・産山村の「うさぎ追い」が動物虐待と批判されるようになってしまった。 →日田の祭りも時代にあわせたかたちにしていく必要がある。 ・祭りは自然発生的であるため、改めて「目的」を考えると難しい。 ・地域の守り神の信仰 →飢饉や戦乱の渦中ではない、「今」の信仰の在り方の検討することも必要ではないか。 ・コロナ禍以降の問題 →３年間実施できなかったことで、途切れてしまう可能性がある。 ・大野楽等、ビデオで所作の復習をしている。 ・わらじや飾り物の作成による地域コミュニティの形成が期待できる。 ・近年、地域のつながりが希薄になってきている。 →安心して行事を行うためには地域コミュニティの繋がりが重要である。 ・外に出ていった人たちが安心して帰ってこれるような地域づくりをしていく必要がある。	・神楽 ・石橋 ・山の文化（英彦山、岳滅鬼山） ・永興寺の十一面観音立像、毘沙門天、吉祥天 ・中世・戦国の能楽や、相撲は神様を楽しませる文化 ・橘劇団の橘大五郎が北野武の映画に出た後、五馬くにちでの橘劇団の公演に多くのファンが五馬に来訪したが、一時的なものだった。 ・技術が伝承できなくなってしまった場合、新しいもかたちで文化財を残していくしかないのでは。 →国指定の文化財の場合、補助をもらうために多くの制限がある。 ・槍鉋を用いての削り方の技術をもつ人も減少している。 ・伝統的建造物群保存地区など、今あるものを残していくしかない。 →建造物単体での指定か、地区全体としての選定かによって、その後の文化財保護の方針が大きく変わってくる。 ・文化財や保存技術は、見る機会や聞く機会がないと、人々はどのようなものか分からず、失われてしまう。昔話としてでも残っているとよい。 ・道路改良の際、阿蘇山の噴火による火砕流で流された９万年前の埋没樹木が発掘された。これまでわからなかった昔のことが分かると面白い。 ・地域のことを知ってほしい。伝えていくことが重要。

総括

〇自然（山・川・水）　→　林業、産業、信仰

〇商人文化／農村文化　→　日田祇園、年中行事、生業

《資料9》

令和４年度第３回
日田市文化財保存活用地域計画ワークショップ

令和５年３月９日（木）　１４時００分～
日田市民文化会館「パトリア日田」スタジオ１

１４：００　開会

【第一部】

１４：００～１４：１０
〇第２回ワークショップの報告

１４：１０～１４：２５
〇保存や継承に課題を抱える文化財等（日田祇園の曳山行事）について

【第二部】

１４：２５～１６：３０
〇日田市の歴史文化の特徴について
⑴伝統文化（無形民俗文化財）の今後について
（　休　憩　）
⑵私にとって日田の一番の歴史文化とは

〈今後の流れ〉

１６：３０～１７：００
〇計画策定までのスケジュールについて
〇今後の取り組みについて
〇その他

重要無形民俗文化財「日田祇園の曳山行事」について

(1)国指定の経緯

・市指定　　昭和 47 年 6 月 12 日（隈の祇園会）
・県指定　　昭和 59 年 3 月 30 日（日田祇園会）
・国指定　　平成 8 年 12 月 20 日（日田祇園山鉾振興会）

(2)ユネスコ無形文化遺産に登録

平成 28 年 11 月 30 日、国指定重要無形民俗文化財に指定されている 18 府県 33 件の山・鉾・屋台行事として、「日田祇園の曳山行事」が登録。

(3)日田祇園の曳山行事・祇園祭の概要

所 在 地　　隈地区・竹田地区・豆田地区
保護団体　　日田祇園山鉾振興会
行事期日　　7 月 20 日過ぎの土・日曜日

日田祇園の曳山行事は、隈八坂神社、若宮神社、八坂神社の３社で行われる祇園祭に合わせて行われる行事で、毎年作り替えられるヤマと呼ぶ山鉾が曳き廻されます。現在、祇園祭に曳き出されるヤマは、隈地区の隈町、大和町、竹田地区の川原町、若宮町、豆田地区の下町、上町、港町、中城町の 8 基と平成 2 年に製作された平成山鉾 1 基の計 9 基です。

祇園祭を行う神社は、隈地区の隈八坂神社、竹田地区の若宮神社、豆田地区の豆田八坂神社であり、日田祇園はこの三社の祇園祭の総称です。若宮神社は若八幡とも呼ばれ、祇園社を合祀しています。

日田祇園の祭礼日は、近世においては、隈町・竹田村が 6 月 10 日から 11 日、豆田町では 14 日から 15 日でした。明治期以降は、三地区ともに旧暦 6 月 13 日から 15 日となり、昭和 46 年からは新暦 7 月 20 日過ぎの土・日曜日に開催されるようになりました。

日田祇園は「小屋入り」と呼ばれる山鉾の建造から始まり、「流れ曳き」、「集団顔見世」、昼間の山鉾巡行である「本曳き」、「町内押し」、夜の山鉾巡行である「晩山」などが行われます。

これまで、山鉾 9 基が日田駅前に一堂に会する「集団顔見世（主催：日田まつり振興会）」は祇園祭（7 月 20 日過ぎの土・日曜日）2 日前の木曜日に開催されておりましたが、今年は祇園祭の前の週の日曜（7 月 16 日の夜）に変更して開催されることになりました。これは、見物客の増加による地域経済の活性化と山鉾の勇姿を見て自分も参加したいと思う若者の増加を期待するものです。

隈・竹田地区の「町内押し」では、祭りの初日に、それぞれの山鉾が各町内を巡行した後、

隈地区の山鉾は隈八坂神社、竹田地区の山鉾は若宮神社に納めます。その後、御神幸行列に従って山鉾が巡行します。隈地区と竹田地区の山鉾は、隈八坂神社と若宮神社双方の御神幸行列の巡行を行います。隈・竹田地区の祇園祭は、山鉾がそれぞれ他の鎮守社を参詣するという氏子圏を越えた行事を行っているのが特徴です。

夜には「晩山」を行い、山鉾の背部に垂らした「見送り」という懸け幕をはずし、提灯をさげます。この山鉾を提灯山鉾といいます。

豆田地区では、初日の朝、八坂神社に勢揃いして中城御旅所まで御神幸行列に連ねて巡行し、豆田地区内を山鉾ごと定められた順路で巡行します。初日の「晩山」は、花月川にかかる御幸橋に集合し、豆田地区内を巡行します。二日目の「晩山」は、中城御旅所に集合し一新橋に駆け上がり、気勢を上げてから御幸橋と一新橋を巡回します。

⑷日田祇園の歴史

日田祇園山鉾の文献での初出は寛文五年（1665）で正徳四年（1714）には、豆田・隈両地区で本格的な山鉾がつくられるようになったといわれています。江戸期から明治初期にかけて、山鉾はしだいに巨大化し、明治 17 年には高さ 10 メートルを超える山鉾が登場しました。明治 34 年に電柱の架線により一時山鉾巡行ができなくなりましたが、大正 13 年に山鉾の高さを低くし再開されました。昭和 18 年から戦争の影響で山鉾巡行は中断しましたが、戦後数年経って山鉾巡行は復活しました。豆田地区では、昭和 36 年から再び中断しましたが、昭和 61 年に中城町、昭和 63 年に港町、平成元年に下町、2 年に上町の山鉾が復活しました。

⑸山鉾の特徴

日田祇園の山鉾は、多層人形山車の曳山です。人形は歌舞伎の名場面を題材とし地元の人形師が製作しています。一部の屋形等を除いて、人形と飾りは毎年新調します。山鉾の台車には囃子方が乗る囃子台があり、その上部に人形と屋形を設置する舞台が置かれています。山鉾の背後には見送りと呼ばれる懸幕を垂らし、台車の高欄の下には緋羅紗の水引を引きまわします。見送りには緋羅紗地に金糸などで鷲・虎・麒麟・鳳凰・唐獅子などの刺繍を施した華麗な懸装品で、幕末から明治期に製作されたものです。

⑹山鉾巡行に華を添える祇園囃子

祇園囃子は、江戸から移住してきた小山徳太郎が伝えたといわれています。現在の演目は幕末期から昭和初期にかけての俗曲・端唄・流行歌であり、他の祇園囃子とは楽器構成も曲目も異なった独特なものです。三味線と笛、それに太鼓で演奏するのが特徴で、笛は明笛の系統をひく横笛です。

⑺現状と課題

・少子高齢化による、行事の担い手・後継者の減少。
・地域の衰退による、資金の確保（山鉾の保存修理や見送幕の復元新調等）。
・用具の確保

《資料9》

2022 7/1 西日本

日田祇園 曳き手初公募

コロナ禍人手不足 山鉾位置確認サービスも

曳山行事を行う6山鉾の巡行予定（6月29日現在）

		7月23日（土）			7月24日（日）		
		午前	午後	夜	午前	午後	夜
隈地区	三隈町	○	○	×	○	○	×
	大和町	○	○	×	○	○	○
竹田地区	若宮町	○	○	○	○	○	×
	川原町	○	○	○	○	○	×
豆田地区	港町	○	×	×	○	×	×
平成山		×	×	○	×	×	×

日田祇園山鉾振興会は、3年ぶりに開催する7月23、24日の日田祇園の「曳山行事」で、山鉾を動かす曳き手を募集している。新型コロナウイルス禍による人手不足解消や祭りの伝統継承に向けて初めて公募する。また両日は各山鉾に衛星利用測位システム（GPS）端末を付け、巡行の現在地をネットで確認できるサービスを初実施する。

市などでつくる日田まつり振興会によると、曳き手は例年、九つの山鉾を動かす各町などの団体がそれぞれ地元住民や企業、学校に呼びかけて集めていた。ただ曳き手は年々減っており、今回はコロナ禍も重なったため公募にかじを切った。

参加条件は18歳以上の日田市民。参加無料、応募者の希望を聞きながら各町に振り分けていく。女性は「平成山」への参加となる。原田啓介市長は6月29日の記者会見で「曳山行事を市民全体で支えていくスタートにしたい」と話した。

山鉾の位置情報確認サービスは、巡行を観覧する観光客などの利便性向上のために導入。チラシなどに掲載のQRコードをスマートフォンやタブレットで読み込めば確認できる。

同振興会によると、今年の曳山行事は六つの山鉾が参加。両日とも午前、午後、晩山（夜）の三つの時間帯で、それぞれが可能な時間に巡行する予定という。豆田下町は飾り山（7月23、24日）のみ公開。飾り山は平成山のみ7月8日から、他の五つの山鉾は同月16日以降に公開する方針。

曳き手の募集は7月11日午後5時まで。問い合わせと申し込みは同振興会事務局（市観光課）＝0973（22）8210またはFAX＝0973（22）8328。（藤原賢吾）

2022 6/30 読売

曳き手初公募で 日田市長が言及

「市民で支える始まりに」

日田祇園祭（7月23、24日）での山鉾の「曳き手」について、日田祇園山鉾振興会が一般から初めて公募をしていることに関し、日田市の原田啓介市長は29日の定例記者会見で「（祭りを）市民で支えていくスタートになれば」などと語った。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で曳き手が不足していることの措置。原田市長は「今回、コロナで人が集まりにくくなったというのは大きなきっかけで、これまで町内だけで進めていた曳山行事を、市民全体で支えていく、一つのスタートとなればよい」と話した。

募集は基本的に市内居住の18歳以上の男性が対象だが、女性の応募も受け付ける。山鉾の一つ「平成山鉾」の前方で綱を引く役などで参加を受け入れる予定。

《資料9》

(2023) 2/3 大分合同

「集団顔見世」日曜開催へ

日田祇園祭

休日の集客効果に期待

【日田】日田市は2日、日田祇園祭の「集団顔見世」について、開催日を本祭2日前の木曜日から1週間前の日曜日に変更すると発表した。休日に実施することで観光振興や伝統文化の効果的なPRを図る。今年は本祭が7月22、23日で、集団顔見世は16日になる。

集団顔見世は市内8町の山鉾が日田駅前広場に一堂に会する観光行事。

日曜開催は昨年3月、日田商工会議所など市内3団体が日田祇園山鉾振興会（草野圭次会長）に要望していた。振興会は協議を重ね、日程変更を決めた。宿泊客の増加が見込める土曜日の実施も想定しているという。

ただ、山鉾の組み上げ作業など本祭の準備を現在より1週間～半月ほど前倒しする必要がある。休日のたびに参加する引き手の負担増加も課題という。

草野会長は「新型コロナウイルス禍で疲弊した宿泊業者などの後押しになる。多くの人にPRすることで、将来の担い手確保にもつながればうれしい」と話している。

（刀根徹朗）

2019年7月にあった日田祇園の集団顔見世

2019年に開催された集団顔見世

2/3 西日本 (2023)

「集団顔見世」4年ぶり

7月16日 日田祇園の前週日曜

日田まつり振興会は2日、日田市の夏の風物詩「日田祇園」に先駆け、9基の山鉾が一堂に集まる「集団顔見世」を4年ぶりに開催すると発表した。新型コロナウイルスの影響で2020年から3年連続で中止になっていた。

集団顔見世を行う同振興会と日田祇園を主催する日田祇園山鉾振興会が協議して決定した。また、集団顔見世は例年、週末に開かれる祇園祭直前の木曜に実施していたが、今回から前週の日曜に変更。人口減により平日は担い手不足が予想され、週末は集客も見込めることから判断した。今年の集団顔見世は7月16日の予定。

集団顔見世は日田祇園を全国にPRするため1989年に始まった。豪華絢爛な9基の山鉾がJR日田駅前に集まり、コロナ前の2019年には約1万6千人が集まった。

（藤原賢吾）

《資料9》

日田祇園の曳山行事

2023.3.2 読売

「集団顔見世」支援へ

地元団体が実行委

今年は日曜に行われる日田市の「日田祇園の曳山行事」（国の重要無形民俗文化財）の「集団顔見世」を支援しようと、地元の経済、観光、行政団体が2月下旬に実行委員会を発足させた。委員長の十時康裕・日田商工会議所会頭らが1日、記者会見を開き、「曳山行事の継続的・持続的な展開に寄与したい」と説明した。

「日田祇園の曳山行事」について現状を説明する草野副委員長（手前左）。同右は十時委員長

9基の山鉾がJR日田駅前に勢ぞろいする集団顔見世は1989年、祇園祭（今年は7月22、23日）の本番への調整を兼ねて始まり、これまでは2日前の木曜日に開催していた。集客増につながり経済効果を高めるため、商議所、観光協会などからの長年の要望を受け、今年は同月16日の「日曜開催」が決まった。

新型コロナウイルス感染の影響で、3年ぶりに開かれた昨年の祇園祭は、4基の巡行にとどまり、集団顔見世は中止に。少子高齢化、人口流出で祭りを担う人材が減少しており、祇園祭そのものの存続が危ぶまれているとして実行委を発足させた。具体的な支援策は今後、検討していくが、十時委員長は「今まで、各町ごとに山鉾を動かしてきたが、今後は市全体で支える仕組みにしていく必要がある。試行錯誤し3、4年と時間をかけながらいい形を探っていきたい」という。

副委員長の草野圭次・日田祇園山鉾振興会長は「神事の祇園祭は、昔からの伝統をしっかり守っていきながら、集団顔見世は市民を巻き込んだ形にしていきたい」と話した。

《資料9》

日田祇園山鉾保存修理事業【実績・計画】

年　度	町　名	対 象 物 件
平成 19 年度	大和町	見送幕（岩に虎）・水引幕（双龍）
平成 20 年度	川原町	山鉾
平成 21 年度	港町	見送幕（唐獅子牡丹）・水引幕（巴カ紋と宝珠）
平成 22 年度	大和町	山鉾
平成 23 年度	川原町	水引幕（龍虎）・旗
平成 24 年度	若宮町	山鉾
平成 25 年度	豆田上町	山鉾
平成 26 年度	豆田下町	見送幕（鳳凰）・水引幕（龍魚）
平成 27 年度	中城町	見送幕（玄武）
平成 28 年度	港町	山鉾
平成 29 年度	豆田下町	山鉾
平成 30 年度	中城町	山鉾
令和　2 年度	大和町・若宮町	見送幕（麒麟）・棒鼻
	豆田上町	見送幕（鯉の滝昇り）
	中城町	水引幕
		報告書作成